

「あはれ薄命のフランチスカ！」

私は低く斯う私語いた。

風はこの聲を捕へて、廣々と荒れ果てた草原の、物淋い墓所へと運んだ。その聲は、新しい土饅頭の側なる垂柳に留り、枝間に籠つてなほ泣いて居る。

「あはれ薄命のフランチスカ！」

(終り)

有感 二首

松浦寅三郎

勸學兼勤儉
皇謨萬古尊
唯知天職重
禍福不須論
此地敦風教
學徒多滿門
臨饗莫他技
唯有赤心存

長詩

熊本市郊外景物詩

江中紫秋

秋の日午後二時過ぎの郊外に佇みしとき、